

Nuclear Factor κ B (以下NF κ B)の動態がOSLの発症機序に関与していること、Transforming growth factor β 1 (以下TGF β 1)がNF κ Bの動態に影響していることを明らかにしてきた。今回NF κ Bが果たしている役割について、Smad signalingとの関連に注目し検討した。

【対象と方法】手術中に手技の一部として採取したOSL (6検体)の非骨化部靭帯を以下の条件で培養した。① rhTGF β 1単独添加, ② rhTGF β 1+rhRANK (receptor activator of NF κ B) ligand. ③ rhTGF β 1+pyrrolidine dithiocarbamate (以下PDTTC). ④ rhTGF β 1+BMP2. Dignamの方法に準じ①②③④の核蛋白を抽出しp65RelA/NF κ B, Smad4についてWestern-Blot法を用いて検出した。また非添加群をcontrolとしてALP活性について比較した。

【結果】① 4検体にp65RelA/NF κ B, 3検体にSmad4が検出された。p65RelA/NF κ B検出例でALP活性は低下した。② 6検体にp65RelA/NF κ B, 3検体にSmad4が検出された。ALP活性はp65RelA/NF κ B検出4検体で低下した。③ 3検体でSmad4のみ検出され、この内2検体でALP活性が上昇した。④ 6検体でSmad4のみ検出され、いずれもALP活性の上昇が認められた。

【考察と結論】OSLの発症機序において、TGF β 1の下流にNF κ BとSmad signalが存在し、Smadによる未分化間葉系細胞の初期分化をNF κ Bが抑制している可能性があると考えた。この結果は今後のOSLの治療に重要な示唆を与える。

PC-58.

顎骨に発生した傍骨性血管腫の1例

(口腔外科学)

○遠藤 理子, 金子 忠良, 松田 憲一,
高橋 英俊, 千葉 博茂

骨組織に発生する血管腫は軟組織に発生するものに比較してその頻度は少なく、特に頭頸部領域ではまれとされている。今回、われわれは左側下顎骨に発生した傍骨性血管腫の1例を経験したので、その概要を報告する。症例は67歳の女性で、左側下顎の疼痛を主訴として2001年4月[]に当科を受診した。現病歴

は2000年10月頃より左側下顔面部の疼痛を自覚したためかかりつけ歯科を受診し、左側下顎臼歯の抜歯を施行されたが、症状は軽快せず、受診した近医内科より、大学病院口腔外科への受診を勧められ、2001年1月に某大学病院口腔外科を受診した。左側下顎臼歯部骨腫の診断で通院により経過観察を続けたが症状の改善がみられないため、2001年4月[]に当院耳鼻咽喉科を受診し、そこより精査加療を依頼され4月[]当科を受診した。初診時の顔貌は左右非対称で、左側下顎下縁部に半球状で骨様硬の腫瘍が認められ、同部に圧痛を訴えた。パントモ X 線写真では左側下顎骨下縁部に小指頭大の半円形、境界明瞭な不透過像を認めた。下顎骨腫瘍と臨床診断し、2001年12月[]に全身麻酔下に口腔外より腫瘍切除術を施行した。腫瘍は既存の皮質骨から移行的に半球状に膨隆し、表面は粗造で赤褐色を呈していた。病理組織学的検査では増生した骨の表面や骨梁内にanomalous dilated vascular channelが増生し、その内腔には赤血球がみられ傍骨性血管腫との診断を得た。現在、術後5か月を経過しているが再発等は見られない。

PC-59.

顎骨再建における仮骨延長法の応用について

(口腔外科学)

○中島 淳江, 千葉 博茂, 松尾 朗,
井上 雄, 竹内佐和子, 金子 忠良,
高橋 英俊

【目的】仮骨延長術はIlizarovにより開発され、従来は整形外科領域で応用されてきた。1992年にMcCarthyらが始めて顎顔面領域に臨床応用し、現在急速にその適応が拡がりつつある。当科においても最近、動物を用いた骨延長の実験と臨床応用を開始し、成果をあげつつある。今回われわれは、当科で行った仮骨延長症例について供覧し、その適応について若干の考察を加えたのでその概要を報告する。

【症例】対象は、2001年から2002年までの1年間に仮骨延長術を施行した6例である。性別は男性3例、女性3例で、年齢は18歳から72歳で平均44歳であった。延長部位は歯槽堤3例・下顎骨体部1例・下顎枝1例・顎関節1例であった。口腔内装置を使用した症例は4例、口腔外装置を使用した症例は2例であった。